

8月上旬の夕刻、能登空港から眺めた夏空です。手前では羽田行きの最終便が駐機し、ボーディングブリッジが接続されて搭乗が始まっています。その向こうの空には、ひととき巨大な雲がそびえています。強い日射で暖められた地表付近の空気（サーマル／熱気泡）が激しく上昇し、まず雄大積雲となり、さらに上空へ発達して積乱雲、いわゆる雷雲にまで成長したものです。

雲の上部は対流圏と成層圏の境界である「圏界面」付近に達しています。ここまで上昇すると、上昇気流はそれ以上進みにくくなるため、雲は横方向へ大きく広がります。上部には氷晶からなる薄い雲、いわゆる「擬巻雲」が扇状に広がり、鍛冶屋が使う「金床」に似た特徴的な姿になります。この形から、このように発達した積乱雲は「かなとこ雲」とも呼ばれます。青空を背景に白く輝く姿は実に雄大ですが、その内部では激しい上昇・下降気流や雷が発生しています。

この積乱雲の「根」にあたるのは、能登空港から見て南東方向の富山県高岡市付近で、この時刻には激しい雷雨に見舞われていました。空港からは美しい夏雲として眺められても、航空機にとって発達した積乱雲は避けるべき危険な存在です。間もなく離陸する羽田行き最終便も、パイロットや運航担当者が気象レーダーなどで雲の位置と発達状況を確認し、この巨大な積乱雲を十分に避けるルートを選んだことでしょう。夏の夕空の美しさと、激しい大気の活動を同時に感じさせる光景です。

（2026 年 8 月上旬／能登空港）

